発行者
公益社団法人　関西吟詩文化協会

公認　**華洲会**（広報紙）

発行責任者　会　長　濱田華兗
編集責任者　広報部長　栗岡尚煌

「華」第60号　発行:平成27年1月20日

主な記事

会長執筆　華洲会の歴史　1面～2面
種田・小寺　両副会長に聞く　3面
会主　三浦華洲先生の思い出　4面
昇格・昇段　5面
三浦先生米国道中記　6面
我が支部自慢　頑張るチビッ子　7面
吟詠漢詩史蹟探訪　8面

大会スローガン

『華洲会50年　そして未来へ』

平成27年11月29日（日）太閤園で華洲会創立50周年記念大会を開催

会主
故 三浦華洲先生

会主三浦華洲先生は、人生で生涯の師と仰がれた先生方との出会いが、生涯吟道の道を歩む礎となったのではと思います。

華洲会 会長
濱田華兗

大会開始に向けて機関誌『華』で、濱田華兗会長が執筆された華洲会の歴史編を紹介します。

先ず、華洲会の会員層を見ますと、会主・故三浦華洲先生から直接ご指導を受けた吟号「華」の保持者も少なくなり、本会の活動の中心的な層は、孫弟子、曾孫の時代に入りました。

本会の50年を振り返るに当たって、本会のみならず、吟界で活躍して頂く次の世代の人達に本会創始者、故三浦華洲先生について又、本会の歴史と現状を認識して頂く為に述べてみたいと思います。

△・△・△・

書道の師匠は『佐藤昇雲』先生でした。宮崎東明先生の紹介です。書道基本永字八法・五位百法を習う為に道場を通い、多くを習得されたとあります。

総本部教本の墨書を東明先生ご逝去後１１４詩書されています。

三浦華洲先生は、吟界の中で他流会派を問わず多くの吟友との出会いがありました。その中で特に金蘭の友として、心を許し，終生変わらぬ親交を続けられたのが**鷺声吟詠会**創主の**塩谷鷺聲先生**でした。

『塩谷鷺聲先生』本会の競吟大会、錬成会などの大会顧問としてご臨席を賜っておりましたので、本会会員の皆様から尊敬の念をもって親しまれた先生です。

昭和６３年２月、三浦華洲先生が逝去されお別れの時、塩谷鷺聲先生は哀惜の情をもって、嗚呼…吟界の巨星が静かに逝くと、深く悲しまれました。告別式の当日、塩谷先生が静かに首を垂れていたお姿が印象に残っています。

紙上の関係で全てを書くことは出来ませんが、この半世紀にわたり本会の活動を振り返り、既に黄泉の国に召されましたが本会を支えて頂いた故人・会長、副会長を始め支部長、分会長、また多くの会員の方々や、日々活気に満ちて華の如く栄えた往時に思いを馳せながら、未来に繋ぐために、今しっかりと足跡を残して、意義ある５０周年に向けて会員の皆様とともに取り組んで行きましょう。

華洲会 創立５０周年記念大会 趣意書

華洲会会員各位

謹啓　新年明けましておめでとうございます。華洲会支部、分会の皆様には益々ご清祥のことと存じます。平素は華洲会に対し格段のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、平成２７年は華洲会が発足して５０周年になります。機関誌『華』５９号でお知らせいたしましたとおり、今年１１月２９日（日）太閤園（大阪市都島区）で華洲会創立５０周年記念大会を開催いたします。大会は、『華洲会５０年　そして未来へ!』をスローガンとして、「会員中心の、なおかつ来賓にも喜んでもらえる内容にする」との方針に基づいて準備作業を進めております。

半世紀にも及ぶ伝統ある華洲会の歴史の１ページを飾り、次の世代に引き継ぎ、さらなる発展を目指す為にも、是非とも大会を成功させて会員の皆様と喜びを分かち合えたらと願っております。それには、会員一人ひとりのご協力がなくては成就する事は出来ません。

厳しい世相の中で多少のご無理もあるかと存じますが、何卒ご理解、ご協力の程お願い申し上げます。

謹白

大会会長　濱田華堯
大会実行委員長　種田紅鞠
大会実行委員　一同

会主三浦華洲先生の略歴

明治３３年（１９００）
１０月６日大阪市久左衛門で長男として生まれる
大正１２年（１９２３）
３月大阪薬学専門学校（現大阪大学薬学部）卒業薬剤師・薬学士の資格取得〔２３歳〕
大正１４年（１９２５）
家業の薬品業を継ぐ〔２５歳〕
昭和９年（１９３４）
８月６日関西吟詩同好会入会（会員番号六〇六番）〔３４歳〕
昭和１４年（１９３９）
本部理事就任〔３９歳〕
昭和４２年（１９６７）
本部副会長就任〔６７歳〕
昭和４３年（１９６８）
３月華洲会設立〔６８歳〕
昭和４４年（１９６９）
３月第１回訪米旅行（副団長）
☆（６面）に会主執筆の米国道中記が掲載
１０月１２日宮崎東明先生ご逝去により葬儀委員長を務める〔６９歳〕
昭和４５年（１９７０）
三浦華洲古希祝賀会〔７０歳〕
昭和４６年（１９７１）
７月本部総師範〔７１歳〕
昭和４８年（１９７３）
４月公認会の認定を受ける
５月華洲会創立５周年記念大会（於・池田市民会館）〔７３歳〕

心・技・体を磨き、歴史ある当会を継承できる人材の育成

副会長　種田　紅鞠

種田副会長

平成27年11月に華洲会創立50周年という、大きな節目を迎えようとしております。

創始者・故三浦華洲先生が、昭和43年に会を立ち上げ、基盤を築かれ、その後諸先生方のご努力と、会員皆様のご支援、ご協力により、今日、華洲会は関西吟詩文化協会の公認会の第三番目の会となっております。

三浦華洲先生は、特に「礼節、品格」を重んじておられました。会員皆様自身の情熱と素直な心で人柄を磨き、礼節、教養、品性を高め、吟道の精神、誇りと責任を認識しつつ、50年の歴史を伝承し、後世に繋ぐのが私達の務めではないでしょうか。

当面の大きな課題は会員の減少傾向です。役員の先生方には如何に会員減少を止め、増員していくかお骨折り頂き、幸いにも大幅な減少は食い止めております。

高齢化による自然減であり、また趣味の多様化により詩吟に対する認知度の低下も新規会員の獲得を難しくしているのではないかと思います。この難関を乗り切り、英知を絞って前進に努めようではありませんか。

幼少年、青年部の方達は、各種競吟で頑張って頂き、良い成績を取って活躍して頂いております。更なる飛躍の為、心・技・体を磨き、歴史ある当会を継承できる人に育っていただく様、期待しております。

華洲会の更なる発展と未来を若い人達に託すには指導者と会員の融合が大事な事だと思います。

指導者には、師と敬われる品格と人間性を備え、子弟と固い信頼と絆で結ばれ続ける事が大切ではないでしょうか。

創立50年を目指して、今一度足元を見直し、会員一丸となって頑張りましょう。

口コミで吟詠の裾野を広げよう

副会長　小寺　竜鵬

小寺副会長

昨今は、華洲会にとどまらず吟界は高齢化、愛好者の減少が続くきびしい現状となっています。詩吟に限らず映画、時代劇などが衰退の傾向にあるのに対して、ＴＶ・インターネット・モバイルレゲーム・カラオケ全盛の時代となり、趣味も多様化し一人で楽しめることが多くなってきています。

今の時代、カラオケなどその日から簡単に始められるものは多くの人に受け入れられています。しかし、詩吟については、取っ付きにくい、漢詩がよく読めない、すぐには歌えず難しい、また詩吟はお年寄りがするものといった誤解もあり、受け入れがたい状況にあるのも事実です。

それでは会員増員のためにどのような手段を講ずれば良いのか。長期的展望では、年齢の若い人に良質の吟と出会う機会や、詩吟を知らない人に関心を持ってもらう機会を持つ経験を増やす必要があると思います。詩吟の魅力を伝える手段として、インターネットやカラオケなどともコラボして、今の時代に合った分かりやすい吟の選定や高所からではなく敷居を低くして親しみやすく、初心者も一緒に楽しめるような一歩踏み込んだ企画や広報活動が必要と考えられます。

ただそれらが単に、興味付けや何とか詩吟のようにブームだけの一過性のものに終わってもいけません。入口としてはそれでも良いのですが、詩吟は永く楽しめる、やればやるほど面白い、奥が深いと感じてもらえるようなものに発展していかねばなりません。その辺がジレンマとなります。

10年後の未来を想像してみると、このままでは高齢化、愛好者の減少は留まることはないと思われます。詩吟ばなれ愛好者の減少期にもかかわらず、幸いにも華洲会では毎年詩吟愛好者を増加されておられる指導者が多数おられます。その実践されている体験を語ってもらう。指導者の考え方が一致すれば、詩吟離れは食い止められる。もっとポジティブに考えて、詩吟を知らない人に知ってもらう。

結局のところ妙案はなく、口コミによってそれぞれ会員一人ひとりが他の一人に詩吟の愛好者となる勧誘を行い、地道に裾野を広げる努力を毎日続けることしか無いのではと思います。

昭和49年（1974） 第2回訪米旅行（74歳）
昭和51年（1976） 関吟大阪府連合会結成、初代会長就任（76歳）
昭和52年（1977） 7月三浦華洲喜寿祝賀（於・大東市立市民会館）（77歳）
昭和53年（1978） （社）全国日本学士会文化功労アカデミア賞受賞（78歳）
昭和54年（1979） 2月鷲声吟詠会第1回交歓吟詠大会（於・旭産業会館）7月中国旅行（団長）（79歳）
昭和58年（1983） 12月三浦華洲書道個展（於・

詩吟の道を歩んで

常任相談役　深町華燁

夢中に過ごした人生、夢中に楽しい人々との出会い、私は今50年の時の流れを振り返ってみて詩吟を習った事、私の生涯の糧となり昭和39年10月入会、本部の会員番号一四二三七、しみじみとした思いで、三浦華洲先生との出会いを噛みしめる様に思い起こしております。

先生は四條畷当時、小楠公の首塚近くの会社に勤務されて、その帰りに教場として楠の里の公民館や駅前に大阪銀行、私共の両親の家などと転々と変わられ、3年目には野崎にも新しく支部を結成。四條畷駅前の大阪銀行において野崎支部結成。四條畷支部3周年・豊中支部3周年・コクヨ支部7周年―と銘打った合同記念吟詠大会が昭和42年1月29日開催されました。

岩橋華竜先生と私は受付をしております。当時のプログラムが私共にあります。総本部の会長を始め伊豆丸鷺洲、田中哲菖、宮崎渓蘭、榎秦哲尊、山岡哲山、塩谷鷺聲先生方のお名前が並んでおります。有名な先人の諸先生方、華洲先生のお付き合いの広い事がよく分かります。

漢詩は、三浦先生は和歌山の高橋覧川先生に憧れて勉強に余念がありませんでした。

私共も太刀掛呂山先生の山陽風雅に入社（入会でなく、漢詩は吟社）しました。投稿させていただき、力不足の頭で、師にほめていただける事を楽しみに励みました。

その頃の詩の中で太刀掛先生の批評文を三浦先生に報告申し上げた時、いたく喜びくださり、早速何の予告もなく、次の週には常幅の書を賜りました。

墨痕鮮やかに
桜雲万朶映江流
風巻紅塵登小丘
高詠相親詩酒楽
青山一日洗春愁

今では、私の部屋を飾り

深町華燁　作

三浦華洲　書　として燦然と壁面を飾っております。

先生の弟子への温情、眺めては人生の漢詩と吟詠に対する指針を得ております。

頃合いを見て、そっと酒を

大木華蕃常任相談役

恩師・会主先生との出会いは、深町華燁先生の後を受けて会計長となった頃かと思う。上納金が少し遅いと「今月の上納金を貰ったかいな」と、たまに催促されることがあった。

山口華雋先生が単身赴任の身となり、福知山へ行かれて暫く三浦会主が寺川公民館へ指導に来て頂いた時期があった。森田華練君が野崎駅迄の送迎をやってくれて、お酒好きの先生には途中おつまみと酒を用意。頃合いを見計らって召し上がっていたのが印象深い。会主の達筆な書が欲しくて、然し中々切り出し難かった思いが未だに残っている。

三浦華洲先生の思い出

（平成17年6月　華32号より）

故佐々木華豊第2代会長

先生は能筆で、家では少年少女に習字を教えておられました。特に作詩は死ぬ直前まで作っておられたようで、ベッドの上に書き残してありました。先生は酒を愛し、吟一筋でした。酒の相手はよくさせられました。先生は少々奥様が苦手のようでした。これも酒の隠れ飲みで、奥様に可なりきつく窘（たしな）められていたようです。

小野華篁常任相談役（当時副会長）

先生は教室（四條畷）に来る前に必ず駅近くの居酒屋で飲んでから来られ、さらに誰ともなくワンカップとおつまみを差し入れますが、お茶代わりに飲んでおられた。

大上華鞠常任相談役（当時副会長）

稽古場は錦町公民館、午後6時から8時迄、先生の好物であるお酒1本、それに夕方に作ったおかず少々を持っていき、お稽古の前にお茶代わりにきゅっと一杯、いつものことで、2時間の練習は楽しく活気がありました。

林華璟常任相談役（当時常任理事）

初めて先生にお目にかかった時、何と品の良い先生、味わい深い吟をされる先生とお見受けし、教えて頂くなら此の先生だと決め、休む事無くひたすら通いました。その先生が大変偉大な先生である事を後に知る事になります。

積華澗参与（当時常任理事）

『山中の月』が得意で、よく吟じておられました。吟詠については「品格と格調高い吟詠」をと、とても厳しく指導されていました。「清貧であれ」高額な報酬を求めてはならないと、奉仕の精神で誠心誠意物事に当たる様、折にふれて話されていました。

大東市立市民会館）〔83歳〕

昭和59年（1984） 2月春洲会第1回交歓吟詠大会（於・大東市立市民会館）〔84歳〕

昭和60年（1985） 10月三浦華洲吟道50年祝賀会（於・東洋ホテル）〔85歳〕華洲吟詠集『無我』発行

昭和62年（1987） 本部元老宗範第1号〔87歳〕

昭和63年（1988） 2月12日ご逝去、享年88歳

平成元年（1989） 5月華洲会創立20周年並びに会主・故三浦華洲先生を偲ぶ会（於・大東市総合文化センター）『遺稿三浦華洲詩抄』発行

平成8年（1996）

平成27年度　華洲会昇段試験課題詩

＊試験日は春・秋の2回（日程は未定）

＊初段は新教本初級編吟題20題から選定

区分	吟題	作者	旧教本番号
初段	送元二	王維	A6-1
	示塾生	廣瀬淡窓	A7-1
	白帝城	李白	A9-3
	川中島	賴山陽	A11-2
	山行	杜牧	A16-1
区分	吟題	作者	番号
二段	磧中作	岑參	A43-2
	望廬山瀑布	李白	A46-1
	秋思	劉兎錫	A47-3
	登鸛鵲樓	王之渙	A54-3
	後夜聞沸法僧鳥	空海	A49-1
三段	華城春望	篠崎小竹	B1-1
	歸省	狄仁傑	B4-2
	述懐	蒲生君平	B7-2
	遣興	文天祥	B18-1
	可意	良寛	C25-1
四段	兒島高徳	齊藤監物	B11-1
	筑前城下作	廣瀬淡窓	B12-2
	途上	南摩綱紀	B13-2
	酌酒與裴迪	王維	B17-2
	送夏目漱石之伊予	正岡子規	C24-1

平成27年度　昇格試験課題詩

区分	吟題	作者	番号
師範	野口英世	松口月城	C2－1
	楠帶刀之歌	元田永孚	C9－1
	正氣歌	廣瀬武夫	C10－1
	侍與歌	賴山陽	C16－2
	虞美人艸	曾鞏	C18－1
	把酒問月	李白	C19－1
	淺みどり	菅原孝標女	D2－1
	くれないの	正岡子規	D2－2
	春日野の	武田勝賴	D2－3
	試験日：7月5日		
準師範	華城春望	篠崎小竹	B1－1
	歸省	狄仁傑	B4－2
	述懐	蒲生君平	B7－2
	筑前城下作	廣瀬淡窓	B12－2
	酌酒與裴迪	王維	B17－2
	遣興	文天祥	B18－1
	送夏目漱石之伊豫	正岡子規	C24－1
	可意	良寛	C25－1
	試験日：7月19日		
師範代	過藤樹書院	伊藤東涯	A41－3
	碩中作	岑參	A43－2
	望廬山瀑布	李白	A46－1
	秋思	劉禹錫	A47－3
	後夜聞佛法僧鳥	空海	A49－1
	烏衣巷	劉禹錫	A52－3
	江雪	柳宗元	A54－1
	登鸛鵲樓	王之渙	A54－3
	別離	澤庵	C25－3
	彦山	廣瀬淡窓	C26－3
	試験日：7月26日		

平成26年度華洲会 後期昇段者

☆**初段**（19人）＝阿部誠（川西北）湯川憲二（同）藤原千鶴（同）別所照美（同）中山清和（清和台）福島正巳（多田東）河田一彦（同）竹田和哉（同）長田シヅコ（同）小谷茂雄（同）竹村のり子（雋詠京都）岩見正子（同）小原康子（同）福田和美（丸の内中央）大橋秀敏（同）中林奉子（同）杉本智恵子（雋詠寺川）松村豊子（同）大植順子（同）

☆**二段**（10人）＝谷口幸子（多田東）垣内経子（同）角谷成三（同）重定克則（川西北）徳谷美佐子（同）鮫島秀一（同）樋口智裕（同）加川秀子（雋詠京都）松田裕子（雋詠寺川）大西智子（指月）

☆**三段**（12人）＝木村士郎（燁吟）川合幸恵（多田東）武田恵子（同）清田緑（清和台）小澤陽子（同）里幸二（同）岡田良子（雋詠寺川）石川久男（雋詠伊賀）斎藤勉（丸の内中央）平野りさ（同）中野宣子（京阪樟葉）村田スミ子（同）

☆**四段**（10人）＝片山朗（川西北）橿村節雄（同）鈴木俊夫（雋詠伊賀）中村伸子（同）中村忠司（同）松田脩（同）常村一則（清和台）佐々木敏雄（同）森本初代（京阪樟葉）百武加津代（指月）

新入会員情報

平成26年度前期入会＝今回の8名を含め計26名。

▽**川西豊友支部**＝田上幸枝

▽**雋詠寺川支部**＝樋上久代

土屋晴子、藤原弘志

▽**雋詠京都支部**＝別宗香緒里

▽**丸の内中央支部**＝森政行

▽**川西北支部**＝叫地輝海（子）

叫地優希（子）

3月華洲会創立30周年記念大会（於・都ホテル大阪）

6月鷺声吟詠会・春洲会・華洲会第1回交歓吟詠大会（於・大東市立市民会館）

平成17年（2005）

11月故三浦華洲先生17回忌追悼式並びに華洲会創立40周年記念大会（於・ホテルニューオオタニ大阪）〔生誕105年〕

平成21年（2009）

4月華洲会春季錬成吟詠大会で構成吟「先人を偲び過去から未来へ」於・大東市立市民会館）

平成22年（2010）

11月華洲会創立45周年記念大会（於・太閤園）

平成27年（2015）

11月華洲会創立50周年記念大会（於・太閤園）〔生誕115年〕

会主三浦華洲先生が執筆した 米国吟詠道中記

昭和44年3月、20日間の日程で訪米吟詠親善視察団（団長藤井芳洲先生、団員総勢25名）が派遣された。副団長を務めた華洲会の会主三浦華洲先生（当時69歳）が執筆したアメリカ吟詠道中記が哲友会発行の機関誌「哲友」（10～14号＝昭和44～46年）に5回にわたり連載されている。

ホテル前で記念撮影（三浦先生写真中央）
「哲友」誌より複写

道中記の書き出しは「吟界初めての壮挙である訪米吟詠親善視察団の日が愈々来た。我々予てより憧れの夢が現実されたのである」とある。3月1日、羽田の壮行会で笹川良一・鎮江先生夫妻ら詩吟関係者多数が見送ったが、視察団派遣は吟界あげての一大事業だった。

会主先生はロサンゼルス、デンバー、サンフランシスコ、ホノルルの4都市における在米邦人との交歓吟詠大会の模様、各地で作詩した漢詩を織り込みながら時々刻々の出来事を詳細に記述されている。

羽田を飛び立ってしばらくして隣合わせに座った三浦先生と藤井団長とは日頃から気心が通じ合っているのでしょう、掛け合い漫才のような二人の会話が面白い。

≪私はウイスキーの栓を抜いて配給されたすし半の鮨を食い始めた。隣席の藤井団長より「アンタはヨウ食ってヨウ飲むなあ。夜通し飲んで食うとるじゃないか」と笑われた。

私は「羽田で配給された鮨を食いそこなったから腹に入れるのや、少しでも荷物が軽くなるから」と云ふ理由で此の行動を続けた。

遂に藤井団長より一句を以ってとどめをさされた。

「夜もすがら　ねむれぬまゝに飲んで食い　荷物まとめて　腹におさめる」≫

加訪米吟詠団有感

鵬程萬里太洋天
翔破千雲異国嶺
遂果米州吟詠旅
交歓随所幾千千

≪本日（3月2日）は我等渡米の最大目的であった羅府（ロス）日米交歓吟詠大会当日である。空は今日の大会を祝福するが如く紺碧に晴れわたっていた。

大東亜戦争以後、在米邦人が相寄り、茶華道と共に吟詠が嗜（たしな）まれ、次第に芽生え始め今日のように米国吟界の隆盛を見るに至った。米国の吟詠人口は約5千人とも云われた。熱意と吟詠精神の深さは、祖国日本に勝るとも劣らないと感じた。

米国吟界の流派は米国錦友会、日本国誠会、尚道会の三派が主で多田正義先生の流れの剣舞、神心流尚道館、正義流神義館、日本吟詠同人会、神刀流剣舞道等があった。≫

「衆心成城」にまつわる話

常任理事　野口箏香

華洲会の演台に敷かれた白布に大書した「衆心成城」、「吟心成城」は、会主三浦華洲先生の遺作。作意は会員の精神的な支柱となっている。

この遺作は昭和59年の作で、この年に入会したばかりの野口箏香常任理事がお手伝いして完成した。「始めは、こんな偉大な先生とは思ってもみなかった」との弁。

野口さんの恩師は故廣瀬華箏先生。叔父の初代会長宮崎華騮先生から姪（廣瀬先生）に詩吟指導を依頼された華洲先生は豊中から野崎の廣瀬宅まで足を運んでおられた。

野口さんは恩師から「演台に三浦先生の新しい揮毫をするので、布を買ってきて作って頂戴」と頼まれ2枚つくった。

書くのは一日で済まず数日かかった。お酒片手にカマボコをつまみ、うどんが付き物でした。また、うな重が大好きで、大食家でした。満腹になった時に書かれ、お腹が減ったら一服してお酒、その繰り返しでした。

三浦先生は廣瀬先生に甘える様子が今も顔に浮かびます。

（代筆　広報部）

平成26年度吟功章

☆**総師範**＝岡島彩鼓（丸の内中央）
☆**高師範**＝中村尚儒（川西北）

平成26年度昇格者

☆**師　範**＝坂本堯綜（京阪樟葉）藤原堯晟（同）竹内峰鼓（丸の内中央）山下心鼓（同）
☆**準師範**＝堀彩剣（丸の内中央）北岸彩駿（同）藤森鴬雋（雋詠伊賀）瀧川燁湲（燁吟）松坂夏子（四條畷）
☆**師範代**＝井元堯誠（京阪樟葉）上田堯岳（同）才賀堯白（同）箱田儒海（川西北）片山節子（多田東）岩崎鳳琇（鳳吟大江）高野鳳照（同）

わが支部の自慢

京阪樟葉支部長　藤原尭晟

京阪樟葉支部は大阪府東北部で京都府に隣接する人口40万の街でもある枚方市の北部に位置し、また三十石舟で有名な淀川に接してます。ＮＨＫ大河ドラマ「軍師　官兵衛」の一場面でもある古戦場「天王山」を望む京阪本線「樟葉駅」の駅ビル階にあるカルチャーセンター内の教室と、樟葉駅から徒歩15～16分の場所にあるもう一つの教室の2か所にて、日々研鑽を重ねながら、濱田華堯先生のご指導を受けています。

「樟葉駅」が新しく生まれ変わり、名称も「朝日カルチャーセンター」として出発しました。駅改札を出て2分で教室に着き、立地条件も非常によく今後、新規会員獲得に繋がればと、会員一同、願っています。

京阪樟葉支部の会員の中には、色んな特技を持っている方が多く、支部でのイベントでもある「京阪樟葉支部新春錬成大会」（毎年2月に開催しています）では、茶道吟、書道吟、剣舞、また律詩、絶句等の独吟、連吟にと頑張っています。また、構成吟においても、本格的な中国語での発音の披露と吟詠、等々　多才に富んでおり、錬成大会等では全員参加で分担し各役を担当し（司会、音響、ＣＤ担当等）。練成大会日の数か月前より皆さん、忙しい時間を割いて錬成大会の為に練習に参加して頂いています。今後も可能な限り練成会を続けて参りたいと思っています。

また、濱田華堯先生のご指導の下「吟行」を適時行っています。吟行では先生の吟行先に関係する多彩な歴史解説、作者略伝に関する明快な説明を聴きながら名所、旧跡、神社仏閣を回りながら詩文の意味合いに触れています。また、吟行日の昼食時は、お互いの親睦を深めながら何時も楽しく過ごしています。

また、親睦を深める為、毎月1回、教室の後にカラオケ会を行い、軽く飲みながらカラオケを楽しんでいます、参加者全員が得意の歌、吟詠歌謡等を歌い、先生のお得意の歌も何時も　聴いています。

教室においても、また教室以外においても、各自、日々、吟詠に関する知識を積み上げ、少しでも詩吟の理解を深め吟詠の技術の向上に努め、日々前進を意識しながら稽古に打ち込んでいます。最近の教室は絶句、律詩　以外に和歌、も教室での教科に加えています。（今後も俳句、新体詩も教科に加わる予定です）。

詩吟教室も会員各自の一つの趣味ですが、趣味の会を通じて仲間の大切さを思い、互いに切磋琢磨し吟詠技術の向上に向かうと共に、詩吟を他の多くの方達に、詩吟を知って頂く為に、可能な限りの努力をしていきたいと思っています。

その為にも異業種の方、地域の方々との交流、また、ボランティア活動の拡大、他の趣味の仲間との交流と声掛け、等々地道な活動をしていきたいと思っています。

錬成会後　みんな揃って写真に納まりました

がんばるチビッ子

詩吟のこと

清和台支部　橋本　潤昌（じゅんしょう）

詩吟を習っています。先生は森蘭豊先生です。森先生は、ていねいに教えてくれます。まず初めに、学校の教科書を読んでそれから、詩吟です。

いつも先生に、「詩吟はたいそうと同じだから、しっかり声をだしましょう」と言われます。口を大きくあけたら、大きな声が出ます。「お腹に力を入れて」と言われる時もあります。そんなこんなでがんばって大会にも、出させてもらってます。

先生にこの間ゆりというものを、教えてもらいました。すごくその時は、きんちょうしてちょっとあがっちゃいました。それからちょくちょく先生の知り合いや、先生のおとなの生徒さんが時どき来るようになったおかげで大会でも前ほどきんちょうなんてしないようになりました。

学校でも、はずかしがらずに、手を上げたり、発ぴょうができるように成りました。ぼくはそれがうれしいです。

しぎんの事

清和台支部　釜本（かまもと）　哲平（てっぺい）

森蘭豊先生にしぎんを習い始めて三年たちました。

声の発声練習や、しぎん、音読などもします。大会にでる時は、きんちょうするけれど自分の出番が終わるとほっとします。

しぎんをやっていて、音読が上手くなったと思います。本を声に出すとき、いつもしぎんで習った事を思い出して読みます。

その時はいつも、しぎんを習っていて良かったと思います。

吟詠漢詩史跡探訪
「梁川星巌記念館」（9月25日）

研修旅行に参加して

多田東支部　谷　叡篤

冷気をまといはじめる季節、心配された雨風に見舞われることもなく、何とか天候に恵まれた当日バスは一路目的地に向かいました。

途中車窓より、土手やあぜ道などに彼岸花が燃え上がるような花をつけて群生しているのが度々見かけられました。

彼岸華は束の間しか見られない儚さが独特の存在感を放っているようでした。

梁川星巌記念館見学がメイン目的の事前予習として、奥山紅雪先生のご指導で星巌作の「芳野懐古」、「常盤雪行」、「一谷懐古」等の吟詠の勉強をしました。

星巌作「芳野懐古」歌碑の前で記念撮影

最初の千代保稲荷に参拝、ここは「先祖の御霊を千代に保て」と祖神と共に宝剣と義家の肖像画を受け賜ったのが始まりと伝えられているそうです。

商売繁盛、縁結び、合格祈願などにご利益があるとのこと、お供えの稲葉に結んだ油揚げを奉納して、家内安全、無病息災、大願成就と欲張りなお願いをしました。

門前町に多くの商店が立ち並び、買い物ツアーと？見紛うほどのお買い物をされた方も見受けられました。

大垣フォーラムホテルにて昼食の後、曾根城跡、華渓寺、星巌記念館へ、華渓寺では爽やかなイケメン？住職の星巌夫婦の生い立ち、人となり、人脈交流範囲、活躍の様子などを滑らかに弁舌、絶妙の語り口で説明を受けました。（私の我儘な願望＝椅子席で拝聴できたら最高）

寺の前庭にある星巌作の「芳野懐古」歌碑の前で、予習の成果の吟を大合吟、記念撮影の後、記念会館の数々の遺品を見学、夫婦の銅像とも遭遇しました。記念会館は想像したより少し小規模かなと感じました。

今まで知らなかった知識をちょっぴり吸収できた感じがしました。忘れられないように今後に生かせたら…と思いながら帰途につきました。満足の一日でありました。

☆企画部からのお礼と報告

平成26年度企画部事業として詩文の作者のゆかりの地を訪れる事業を計画しましたところ70人の多数ご参加いただきましてありがとうございました。

がんばるチビッ子

詩吟大好き

清和台支部　佐藤颯一（そういち）

ぼくは詩吟が大好きです。強く吟じたら、ストレスを発散できるし、全体的にゆっくりなので、リラックスできていい気持になります。けれども、いくさの場面などでは、リラックスなどするひまもないほど、気持ちを入れなければいけないので少したいへんです。

中国の漢詩が日本に来たのだから、アメリカ、オーストラリア……のように全世界に詩吟が広まってほしいです。

いろんな種類の詩吟を聞いてみたいです。

詩吟の感想

清和台支部　藤川　魁人（かいと）

詩吟をならいはじめて三年になります。

この間のカリヨンホールでの、詩吟の発表会で、最初はきんちょうしましたが、意外ときんちょうしませんでした。

そして、いつもの練習では、発表会に向けての練習だから、やり直しもありますが、上手になるので、練習は必要だと思います。

そして、池田の文化ホールのときは、いつも通りだったので簡単でした。いつも、発表会の最後に楽しみにしていることは、賞状をもらうことと、商品券をもらうことです。詩吟は、みんなからしぶいと言われますが、楽しいです。

これからも詩吟を続けられたらといいなと、思います。

会員増員表彰

平成26年度関西吟詩会員増員表彰（対象期間は25年度の1年間）において、華洲会関係は、会表彰として華洲会のほか支部表彰2支部、新設教場表彰2支部、個人表彰5名、会長特別表彰（5年連続会員増員）1名。

☆**支部**＝丸の内中央、多田東
☆**新設教場**＝竹本瑞鼓（東谷分会＝丸の内中央）、田中尚叡（ＯＫＲ北吟分会＝多田東）
☆**個人**＝中村尚瑛（川西北）田中尚叡（多田東）奥山紅雪（雋詠寺川）岡島彩鼓（丸の内中央）竹本瑞鼓（同）
☆**会長特別**＝奥山紅雪

編成後記：栗岡尚煌部長からの申し出により、蒐集済記事をレイアウト編成しています